
キラトシュン

露露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラトション

【Zコード】

Z4577E

【作者名】

露露

【あらすじ】

ぼくたちは戦国時代では騎士^{ナイツ}なんだ。同じ国に属していてね。

それは空想か現実か。二人の少年による、少しせつない物語。

全四話完結。

第一話

ぼくたちは戦国時代では騎士ナイトなんだ。同じ国に属していくね。

シュンはどんな時も空想ばかりしている。

肌は透き通るよつに白く、日焼けしたぼくの腕の半分ほどの細さしかない。

誓いを済ませた騎士は、馬に乗って、大きな剣を振りかざし、一緒に戦場を駆け抜ける。とても勇敢で無敵の戦士なの。

綺麗なその双眸を細めて呟くと、高く晴れ渡る空を見上げた。みつめるシュンの横顔が、その時とても幸せそうだと思つたのは何故だったのだろうか。

騎士は戦いながら、扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから・・・・・

幼さを残した声が、急激に胸に蘇る。そして、ぼくはやつと氣付いた。

シュンはずつと探していたんだ。
求めてやまない扉のありかを。

* * *

「シュン!」
はつと振り返ると、フーンスを挟んだ所に立っている白い肌の少

年が目に映る。数人の生徒たちが彼を囲んだ。

ぼくは釘付けになつて見ていたが、間もなくその集団は笑い声を立ててその場を後にする。何となくそれを見送つたぼくの口からほつと息が漏れた。

「なに溜息なんてついてるんだ綺羅^{キラ}? 試合中だぞ!」

「ああ、ごめん。今戻るよ」

「シウンだろ? あいつもうすぐ美國^{アメリカ}に行くらしいぜ。だからみんなああやつてあいつにまとわり付いてるんだよ」

「うん、知ってる」

「人気者はつらいよなあ」

友人は冗談めかして笑いながら、グラウンドを転がる白黒のボールを目指し駆けて行く。早く来いよ!と促され、ぼくも後を追つた。そうだ。ぼくが知らないわけがない。シウンが美国へ行くって、クラスでも専らの噂なんだ。

誰だつたかはよく覚えていない。クラスの女の子だった。その情報を本人から聞いたから出任せではないと主張していた。だから、知つている。

「綺羅! ボール行つたぞー!」

「おう!」

少しズレたスピードのあるバスを受け、一気に加速する。横からの一人をひらりとかわした。

「綺羅を止めろつ!」

「行けー! 綺羅!」

前からの二人をくるりとかわすとセンターインを超えていた。ぐんぐんスピードがあがる。

一人、二人、三人 邪魔してくる敵チームを軽々と追い抜き、気が付けばゴールは目の前。

羽が生えたように、気持ちがいい。

ぼくには敵などいない。

「綺羅つ! !」

力の限り蹴ったボールがゴールに吸い込まれる。

瞬間、歓声と溜息。

「よしつ！」

ガツツポーズと共に吐き出した掛け声は、さつきまでの憂鬱さを丸ごと吹き飛ばした。会心の笑みでグラウンドを駆ける。

ここでは、ぼくは無敵だ。

*

*

*

家に帰り玄関の扉を開けると、見慣れない靴が目に入った。居間を覗くと一番に母と目が合い、「ぼくは、ただいま」と言った。

その声に反応して客人が振り向く。

「綺羅くん、久しぶりね。相変わらず元気そう」

「小母さん」

シユンの母親だった。軽く会釈して返すと、明らかにやつれた頬が緩む。ぼくは母に視線を向けて、そのまま部屋へと退散した。どつとベッドに体を沈ませると、薄汚れた天井に瞳を向ける。とくとくと心臓が鳴っているのが聞こえるほど、部屋は静寂に包まれていた。

シユンの小母さんと会うのは確かに久しぶりである。

毎日のように顔を合わせていた小学生の時は違い、中学生になつてからは三年生になる今まで全くその機会を逸していた。

というのも、もう長い間シユンとは疎遠になつていたからだ。ぼくらの小学校は規模が小さく、一つの学年に一つのクラスしかなかつたが、中学校は町の大きな学校へ通う決まりだ。その時に初めて、ぼくとシユンはクラスを離れた。

あれだけ仲が良かつたのに、いつも一緒だったのに、結局ぼくたちも同じクラスという些細な繋がりしかなかつたのだ。それぞれに、

それぞれの友人が出来、いつの間にかぼくらは一緒に登下校することも止めた。

「・・・・・シュン・・・・・か」

けれど、少なくともぼくは、シュンと繋がりを絶ちたかったわけでは決してない。もやもやとしてくる心の内がきつとそれを物語っている。

今日、グラウンドの外に立つシュンは、一層青白くなつたような気がした。もうどれくらい、話していないんだろうか。どんな声をして、どんな風に話すのか、思い出せないほどに。

一旦疎遠になつてしまつと改めて話しかけるのも億劫になつた。それでもいつだつたかシュンの家を訪ねたこともある。さんざん迷つた挙句、勢いでインター^{アメリカ}ホンを押したぼくを待つていたのは、開かれることのない無言の扉だつた。小父さんと小母さんは出かけていたのかもしれない。シュンもまだ帰宅していなかつたのかもしれない。

ぼくは、まるで好きな女の子に告白する時と同じくらい速まつていた鼓動の分、失望も大きかつた。それ以降、あの扉を見ていかない。

「・・・・・美国」

近くて遠い、ぼくらの距離。

第一話

ボオ　　・・・ボオ　　・・・・・・

重く低く響き渡る笛の音は、戦闘開始の合図。

馬に乗った騎士たちが、真直ぐ前方を見据えている。迎え撃つは同じ騎士の身なりをした異形の者たち。

「綺羅！」

名を呼ばれ振り返り返したが、戦いは始まつた。流れに任せ一気に前進する。叫声と蹄の音が轟き、戦場はすぐに混沌と化す。次々と敵を倒すぼくは、ここでは無敵だった。誰もが恐れる騎士。ただひたすら目指すは敵の将軍。

「綺羅！」

又、同じ声が呼ぶ。

大きな剣を振り上げ、眼前に立ちはだかつた壁を薙ぐと。

「駿・・・・・・？」

恐らく戦場には不似合いの、透明な肌を持つ美貌の騎士がそこにいた。

笑みを湛え、勇ましく。

「僕の声を忘れたのか？綺羅

「し」

驚愕を隠し切れないぼくに背を向け、駿はまた混沌へと向かって行こうとする。

「駿！」

「行こう、綺羅、一緒に 敵将はすぐそこだ」

駿は高々と剣先を空へ向け駆け出した。ぼくもその後を追い真横に並ぶ。

ぼくらは敵と剣を交えながら、同時に、前進する。

誰よりも速く、誰よりも確実に。

「駿！ 危ない！」

「つー」

背後から迫つた敵に気付き、間一髪、駿が攻撃を回避する。その間にぼくが回りこみ、思い切り敵の背を突いた。敵の騎士は落馬する。

「綺羅　」

「・・・・・駿、やつた」

ぼくの視線の方向へ駿も目をやり、その身なりと印を確認すると、ぼくらは再度顔を見合せた。

「敵将、取つたぞ　！」

ぼくは叫びながらも、高ぶる気持ちを抑え切れない。

言葉に出来ないこの清清しさと気持ち良さは、一体なんだ　？

「綺羅」

馬上の駿が綺麗な目を細めてぼくを見る。ぼくも頷く。

そうだ。きっとこれだ。

駿と、一緒に走つてみたい。

どいまでも、この距離のまま。

*

*

*

学校の廊下でぼつたり、シュンを見つけた。一人で窓の外を眺めている。

陽に透けて茶色に輝く細い髪が微風に揺られ、相変わらず透けそうなほど青白い頬に触れる。少し髪が伸びたかなとぼくは思つたが、それも当てにならない感覚だった。こんなに間近でシュンを見たのも久しぶりだからだ。

ぼくは一つ息を呑んだ。

声をかけなければ、と、気ばかりが焦る。

聞きたい事、話したい事は沢山あつた。

のか、美国の連絡先を教えて欲しい、最近、可笑しな夢を見たんだ・

これらはまた、貴重な話題でもある。

ぼくは意を決して息を吸い込むと、瞬時に笑顔を貼り付けた。

- 1 -

「シヨン！ ここにいたのか。みんな探してるぞ、『写真撮りたい』って奴もいてさ」

見計らうたかのようなダイミンケの良きで、数人の男子生徒がたちまちシヨンを取り巻いた。その中に隠れてしまい、ぼくからは姿さえ見えなくなってしまう。

張り付いたままの笑顔と開いたままの口、中途半足を硬直させたまま、楽しげな笑いを見送っていた。その姿が消えるまで、そうしていた。

それはのどかな昼休み。

ぼくはさつきまでシウンのいた窓辺へ肘をつき、外に向かつて大きく大きく溜息を洩らす。伸ばした視線の先には、サッカーを楽しむクラスメイトたちの姿があつたが、今はそれさえどうでもいい気分だ。

それ違う運命なのだろうが、ぼくとショウは？

変な言い方だが、そうとしか考えられない。

「たいたし、シンの奴も悪しかった……ほくはかりとたはたして、あたふたして……なんか悔しいな……」

ツキンと、胸が痛む。

まるで波紋のように、その痛みは全身に波及する。何故だか分からぬ。無性に泣きたくなつた。

ショソとまた世のよつて、何の憂にも無く、他愛ない話なんかで

笑い合いたい。

ただ、それだけの思いであるの！」

でももしかしたら、それは一方通行の思いでしかないのかかもしれない。勝手に自分が思っているだけで、シユンはそんなことを望んでいないのかかもしれない。

そうでなければ、きっとこんなにすれ違はずがないのだ。

美國行きの噂が流れてもう数週間が経つ。周囲の人間の様子と、本人の様子を見ても、出鱈目な話でないことは明らかだった。

そんな今になつても、シユンから話しかけてこないのは

「…………なんだよ、あいつ…………」

やり切れない思いがじわじわ心を満たしていく。

シユンとの距離は今、どれくらいあるのだろうか。

* * *

小さい頃からシユンは頭が良く、勉強が良く出来た。

反対にぼくは、勉強なんて全くダメ、その代わり運動なら誰にも負けなかつた。特にサッカーなら無敵そのもの。

基本的にはなんでもこなすシユンは運動方面がさっぱりだ。走れば転ぶ、ボールを蹴れば転ぶ、時々道を歩いていても転ぶほど。おかげに全く体力がない、いわゆる運動オソチなのだ。

そんなぼくたちが大の仲良しになつたのは、お互いに上手く補いあつていたからかもしれない。自分にないものは、相手が持つている。

だからなのかどうなのか、ぼくはシユンといふ時が一番心地良かつた。

ぼくがサッカーをしている時、シユンはよく木陰に座り、読書をしながら試合を眺めた。退屈じゃないかと訊くぼくに、シユンはいつも首を横に振つて微笑つた。

ぼくがサッカーをしていない時、シユンは必ずぼくの隣にいた。

いつか一人で丘を登つて、ぼーっとしていたことがある。その時にシユンが言つた。ぼくたちは戦国時代では、同じ国に属す騎士なんだと。

「騎士?」

聞き返すぼくにシユンは頷く。

「誓いを済ませた騎士は、馬に乗つて、大きな剣を振りかざし、一緒に戦場を駆け抜ける。とても勇敢で無敵の戦士なのわ」

そう言つて、頭上に広がる青い空を見上げた。

そのまま言葉のないシユンが気になり、ぼくは横顔に視線をやる。細められた綺麗な瞳は、どこか幸せそうに、遠くを見詰めていた。

「・・・・・シユンも、騎士だつたのか?」

「ん?」

「だから、戦国時代。おまえそんなひょろひょろしてて、運動もまるきりダメでさ」

ぼくの言いたい事を察したのだらう、「そつだね」と呟くシユンは、相変わらず空に瞳をやつたままだ。

「でも無敵だつたつてことは、きっとぼくとシユンが一緒に戦つてたからだな。おまえ頭いいから、戦えなくてもぼくに色んなことを教えてくれる。ぼくは戦場でその通りに動いて、敵に勝つ。うん、これなら確かに無敵だ」

笑い声を上げるぼくをシユンが振り返つた。その瞳にぼくは釘付けになる。

微かに水分を含んだ涼やかな日が、柔らかくぼくを映して揺れている。

泣いているのかと、思った。

「シユン・・・・・?」

「・・・・・戦場にいるんだ・・・・・戦場にて、騎士は、戦いながら扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから・・・・・」

シユンは空想好きだった。

ぼくには思いもつかない、大きな世界が広がっているに違いなかつた。

けれど、なぜだらり。

扉を探している。

それはシュンの心の声のよつな気がして、ぼくは無性に泣きたくなつた。

あの時、きっとぼくは、シュンと一緒に戦つ騎士でありたかった。ぼくが、それを望んでいたんだ。

しかしシュンはそれを拒んだ。

自分は一人でも大丈夫なのだと、そんな決意が込められていく気がした。

敵もこの度は本気だった。

この所の沈黙を破り、全軍率いてやって来た。

捨て身の奇襲作戦。

「ひるむなあ！迎え撃て！」

指揮官の号令で、ぼくも戦闘を開始する。勢いよく駆け出そうとした、まさにその時。

ふと、駿が隣にいないことに気がつく。

すでに混乱し始めていた周囲を見回しても、その姿はどこにも見当たらない。

「・・・・・駿？」

いや、いないはずがない。ついさっきまで一緒にいたのだ。この混乱ではぐれてしまったのか。

「駿！どこにいる！？」

不安だつた。あいつが一人で大丈夫だとは到底思えなかつた。平気な顔をしてはいるが、戦場での経験はまだ浅い。ぼくが隣にいなければ 守らなければ すぐにやられてしまう！

「返事をしてくれ！ 駿！ 駿！ どこだ ！」

乱れ飛ぶ矢を搔い潜り、あつという間に迫つた敵軍と刃を交えながら、ぼくは必死に視線をめぐらせる。

「駿！ 駿！ あっ！」

ざくり、と、重く焼けるような痛みを感じた。異形の騎士がぼくの体を切りつけたのだ。

滴る鮮血に意識が遠のき、重力が働く方向に体が落下する。敵が、見えない。

「・・・・・駿！どこだよ！返事をしてくれ ・・・・・」

答えて。

頼むから。

駿がいないとダメなのは、ぼくの方なんだ

「 綺羅？」

突如返ったその声に、ぼくははつと瞳を上げた。

駿が、そこにいた。

「 駿・・・・・平気、か？・・・・・」

「ぼくは無傷だ。大丈夫」

「それなら・・・・・良かつた・・・・・心配した・・・・・

急に、いなくなるから・・・・・」

「ごめん。失くしてしまったものを探しに行っていたんだ。あれば無いとぼくは・・・・・もしかしたら敵に盗まれたのかもしけない・・・・・」

駿が悲しげに目を細めた。やり切れないとい、今にも泣きそうにな

りながら。

「ぼくは無情にもだんだんと滲んでくる視界を必死に繋ぎ止めたくて、目の辺りに力を込める。

もう一度と、駿を見失わないよつて。

「やつぱり、ぼくはもう一度探しに行くよ。大切なものなんだ。ごめん、綺羅」

駿、と、呼んだつもりが、声にならなかつた。

徐々に遠ざかる、青白い綺麗な顔。

どこに、行くつて？

やつと見つけたのに、去つて行くなんて、やり切れないのはこっちだ。

あんまりだよ駿。

おまえは一体、何を探してる？

それはぼくよりも大事なものなのか？

「・・・・・シ・・・コ・・・ン・・・・・・」

からうじて呴かれたその名に返る声はすでにはない。
ぼくたちの距離も、もう戻らない・・・・・・。

* * *

夏を感じさせる五月の空は、心地よい風に雲が散られ、爽やかな体を現している。
そんな天気には不似合いな重苦しい溜息を吐くぼくは、最近とても憂鬱だった。

人伝にシコンがもう学校に来ていないと聞いたのはつこさつき。
それが駄目押しになつた。

「綺羅あ、今日サッカーするだろ？後で一緒に行こうぜ」

そう、友人に当然のように聞かれ、ぼくは疲れ切った表情を向け

ると言つた。

「やめとく。またな」

「はあ！？待てよ綺羅！最近いつもそれじゃないか、おまえ変だぞ？大丈夫か？」

「…………大丈夫…………」

「おいおい綺羅！」

「大丈夫…………なんかじやない。瀕死だ。

午後、学校からの帰り道。ぼくは一人考えていた。シュンと話すべきか、どうかを。

近頃本当に可笑しな夢を見ている。昔シュンの言つていたのとそつくりな、無敵の騎士として、ぼくたちはいつも戦場にいて、一緒に走っていた。

けれどこの間、ぼくはミスをした。無敵であるはずのぼくが、やられてしまった。

しかもシュンに見捨てられて意識が途切れた。田覓めた時のあの複雑な気持ちは、形容出来ない程の苦々しさだ。

そんな所へシュンの美國行きが迫っていることを知り、ぼくの心中はまさに混沌としていた。

「くそー。どうしたらしいんだつ

ヤケになることで解決したら、どんなにいいか。大きな溜息を吐き出し、ぼくは家に帰り着いた。

「おかえりなさい、綺羅。ちょっと、いい？」

出迎えた母が手招きをする。

促されるまま居間に腰を下ろすと、母親と向き合つた。

「どうしたの？まだテストの答案返つてきてないけど」

半分冗談で半分は本気だった。それ以外にどんな話題があつたのか、この時のぼくには思いもつかなかつたから。

母は一度、深呼吸をした。

「あのね、落ち着いて、聞いて頂戴…………。せつま、シュン

くんのお母さんから、連絡があつて…………」

なぜか、母が言葉を詰まらせた。

突然、得体の知れない緊張が、一気にぼくの体を駆け抜ける。

う学校に来でないから、さくとすぐ出発する」黙つて、ぼくを見詰める母の顔が潤んでいた。

息苦しい。

「綺羅、ションくんがね」
続けて紡がれた言葉はまるで、ガラスが弾けたように耳障りなものだった。

ぼくは一体、どんな表情をしていたのだろう。
かお

あまりに重々しく、
冷ややかな言葉だったからだろうか。

綺羅、シユンくんがね

言わないで。

それ以上

亡くなつたのよ・・・・・。

あれは、夢の世界だと思つていた。

戦国時代を翔ける、勇敢で、無敵の騎士。

「…………うそだよ、そんな…………」

「…………ショーンくんは、ずっと、心臓を患っていたんだって」

「…………まさか…………そんなの、ありえない」

「…………もう、ずっとよ…………母さんも、知らなかつた…………この間、ショーンくんのお母さん、来られていたでしょう…………その時に知ったの」

頭が痛い。割れそうに痛い。

夢の話だ。すべて、夢の。

「でも、あいつ…………美国に行くつて話…………だつて

「この間だつて、・・・・・・あんなに、元氣で・・・・・・

「・・・・・・なぜ美國に行くつもりだつたか、知つてる?」

「ぼくは首を振つた。理由など考えたこともなかつた。

「心臓の手術をするためだつたそうよ・・・・・・本人の強い希望

でね・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ぼくは言葉を失くしていた。

今起きていることは一体何なのだろう。

母はなんと言つたのだつけ。

シユンが死んだ?

「うそだ・・・・・・全部うそだ! 元氣だつたじやないか! 歩いて
たじやないか! 笑つてたじやないか!」

「綺羅・・・・」

「母さんは知らないんだ! あいつを見てないから分からんんだ!
死ぬはずがない! シユンは死ない つ! !」

それはほほ、怒りに近かつた。

馬鹿馬鹿しくて、悲し過ぎて、涙も出ない。

それなのに目の前が霞む。何も見えなくなる。

恐怖。

とてつもない、暗闇。

シユンがいないとダメなのは、ぼくなんだよ

言いたくて、言えなかつた。

もう戻らない距離。

永遠の、距離。

ぼくがあれほど躊躇つて開けられなかつた扉を開き、参加した葬儀。

そこで、静かに眠るショーンを見て、やつとぼくにも実感が湧いた。呼びかけても答えない。そこにショーンはもついない。

「綺羅くん」

「…………小母さん」

田を腫らしたショーンの母親が、今日はどうもありがとうと頭を垂れた。

反射的にお辞儀を返し、顔を上げたぼくの田に、小母さんの微笑みが映る。

「ショーンと仲良くなつて、綺羅へんなほ本当に感謝してゐるよ」

「いえ…………」

曖昧に咳く。

なんと言つたものか、悩んでしまう。

「昔の話です。最近は全く機会がなかつたから…………」

「…………ええ、そうだつたわね」

氣まずい思いを持て余し、ぼくは思い切つて聞きたかつたことを口にしてみる。なぜ、心臓の病気をショーンは隠していたのか。

「…………実は、全部ショーンがそうして欲しいと言つたものだから…………綺羅には絶対に教えないでと、そう言つていたこともあつたわ…………ごめんなさい」

「謝らないで下さい。そつだつたんですか…………ショーンの、」

やはり聞かなければ良かつたと、少し後悔した。あんなに毎日一緒にいて、全く気が付かなかつたぼくもどうかしている。

体力がないから息をきらしたのではなかつた。運動オノンチだから運動が出来ないのでなかつた。全部、心臓の病気のせいだつたん

だ。

それでも、どうしても、思わずにはいられない。

どうしてぼくに、言つてくれなかつたんだ、と。知つていたらそれなりのことが出来たかもしぬないのに。

少なくともあんなに悩まず、いつもシユンの側にいたはずだ。

「綺羅くん、許して頂戴ね。あれでもあの子、心臓を治そつと必死になつていたの。美国で手術が受けられると知つて、とても喜んでいたわ……もう少し、早ければ、それだけが悔しいけれど……」

「…………」

一旦言葉を切り、シユンの母親は気丈にも笑つてみせる。そして、シユンに笑顔が増えて嬉しかつた、そう続けた。

「綺羅くん」

「はい」

名前を呼ばれ返事をしたぼくに、そつと差し出されたのは一冊の本。

「これは？」

「シユンの机の引き出しの中にあつたもので、私にもよく分からないのだけれど……」

「…………これ、シユンがいつも持つてた本です。見覚えがある」

「そう…………やつぱり綺羅くんなら、何か知つていると思つたわ。…………実は、あの子倒れてから、うわ言で“鍵が見つからな”とずっと繰り返していくね……」

「鍵？」

「ええ。私たちも何の事だかさっぱり分からなかつたのだけれど……あの子の部屋を整理していく、それを見つけたの。ほら、ここに、錠がかかっているでしよう。だからもしやこのことでは、と思って」

シユンの母親は本を開く側の所に付いている黒い錠を指し示してみせる。

ぼくは本を開こうとしたが、鍵がかかつていて開かない。

「鍵は・・・・・」

「それが見つからないのよ・・・・・偶然のかしらね・・・・・でも、うわ言で言うくらいですもの。よっぽど、大切なものだつたみたいだわ・・・・・」

瞬間ぼくは、はつとした。

いつかシュンが言った言葉。

騎士は戦いながら、扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから・・・・・

・・・・・『扉』、『大切な物』・・・・・

「これが、シュンの、探していたもの・・・・・？」
ぼくはどこかで腑に落ちないでいた。

自分で持っていたのに、なぜ？

「・・・・・良かつたら、その錠をこじ開けて、中を見てやつてくれないかしら？」
ぼくがあまりに本を凝視していたせいだろうか。

そうしてぼくは、そのまま何となく、あの丘へと登った。
シュンに導かれたのかもしない。

近くにあつた石で錠を壊し、ぼくはひとつ、その『扉』を開いた。

「・・・・・あれ？これ、本じゃない・・・・・ノートだ」

最初のページは白紙だった。

それを捲ると、次のページには一行だけ文字が書いてある。
それはシュンの文字だった。

綺麗に整つた、シュンの文字。

「・・・・・『綺羅と駿のものがたり』・・・・・小説・・・・・?
・・・知らなかつた。あいつ、これをいつも書いていたのか・・・・

・・・

そのノートの中には、シユンの空想の世界が広がっていた。
ぼくに話してくれた、あの騎士のものがたりだ。

時は戦国時代。この国には勇敢で、無敵の騎士がいる。名は綺羅。日に焼けた褐色の肌、巧みな馬術に確かな剣の腕。誰もが恐れる、戦士である。

そこにもう一人、騎士になりたい病弱な男がいた。名は駿。綺羅とは反対に、顔色は悪く、肌も生白い。およそ戦場向きではない男だったが、彼にはどうしても騎士になりたい理由があった。

あの英雄綺羅と、一緒に戦場を駆け巡りたい。自由に、なに憂つことなく、どこまでも、どこまでも・・・・・・

「『駿』が、つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・
・・・
涙が溢れて止まらなかつた。
しゃくりあげて泣いた。

胸がいっぱい、何も考えられない。

「シユン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
・・
よ・・

・・・・・・・綺羅、綺羅・・・・・・

ぼくの病氣のこと、秘密にしていたのはね、君の足枷になりたくなかつたからだよ。
だつてぼくは分かつていた。

いのことを知つたら君は、自由を失つてもぼくの側にいてくれるつてこと。

それだけはしたくない。それだけはしてはいけない。

だからぼくが、綺羅の所まで行く。その時は思い切り、風を切つて走るんだよ。

きつと、気持ちいいはずだ。

綺羅と肩を並べられる口がくるのなら、どんな苦しいことだってぼくは耐えてみせる。

きつと、がんばれる。

・・・・・

シユンの小説の中には、数え切れないほど綺羅の名前があつた。それがぼくのことであり、これはシユンの本当の願いだったのだと、漸く分かつた。

サッカーをするぼくを見ながら、シユンはいつも空想していたんだ。一緒にボールを蹴つて走る一人の姿を。

ここに記録されているのはシユンの夢であり願いだつた。この扉を開くための鍵が、美国で手術を受ける事だつたに違いない。

「シユン！ つシユン・・・・・・つあああつ！ ！」

ぼくは溢れ続ける涙も構わず、喉が千切れそうなほどその名前を叫び続けた。

帰らない日々を渴望して。

あの空に。

・・・・・

綺羅へ。

ぼくの英雄、そして希望。
大好きだよ、綺羅。

綺羅

・・・・

} FIN {

第四話（後書き）

少年二人の友情物語でした。

お付き合い頂いた方、どうもありがとうございました^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4577e/>

キラトシュン

2010年10月8日15時46分発行